

乳腺科

診 療

[診 断]

当科外来では初診患者を毎日受付け、手術日以外の午後の外来も外来を開設している。またセカンドオピニオン外来を毎週月曜日に行っている。昨年の年間外来受診者数は11,762人（前年比114%）であった。

『マンモグラフィ』検診マンモグラフィ撮影認定の有資格放射線技師を中心に、高精度のマンモグラフィ撮影を実施し、早期がんの発見に努めている。そして多くの非触知病変を拾い上げ、早期乳がんを多数診断している。昨年のマンモグラフィ施行件数は3,653件（前年比112%）であった。

『超音波』超音波検査は若年者乳がんの診断、手術術式の決定には必須の検査であり、高解像度超音波装置を使用し、マンモグラフィ同様多くの早期乳がんを診断している。

『画像ガイド下インターベンション』マンモグラフィを使用するステレオガイド下マンモトームや超音波ガイド下の細胞診・針生検および同ガイド下マンモトームなど先端技術を駆使し、低侵襲の確定診断を実践している。

『CT』温存術適応症例の拡がり診断と肺・肝・骨・脳などの遠隔転移の有無および再発症例の治療効果判定などのために施行している。また、平成21年からは1月に着任した新スタッフによる「ワイヤーマーカを用いた三次元マルチスライスCT画像ガイド下乳腺部分切除術*」を放射線科チームと共同して開始している。

『MRI』温存術適応症例の拡がり診断と脳・脊椎・脊髄への転移の有無の検索目的などで施行すると共に、当院で積極的に導入している腋窩リンパ節転移陽性乳癌に対する術前化学療法の治療効果のMRI画像評価を行っている。

『シンチグラフィ』骨転移の有無を調べる骨シンチやセンチネルリンパ節の所在と個数を呈示するリンフォシンチを積極的に施行している。

『臨床検査』白血球（好中球）や腫瘍マーカーなどの血清生化学的検査、および心電図・心エコーなどの生理学的検査を迅速に施行しており、患者の全身状態の把握や抗癌剤の副作用の適確な評価に努力している。

[治療]

『手術』麻酔専門医による麻酔科の術前診察を行い、様々な合併症の管理の下、手術を施行している。術式の適応については、放射線診断医チーム、放射線部スタッフとの合同カンファレンスを行い、術前の十分な検討の後、局所コントロールを徹底した手術を施行している。昨年手術件数は184件（前年比98%）であった。

『薬物療法』症例毎に慎重な臨床・病理組織学的評価を行い、エビデンスに基づく化学療法・内分泌療法を展開している。分子標的療法やビスフォスファネート製剤の投与例も増加している。さらに関係各部署の支援を得て、がんセンター病院としての責務である臨床試験にも積極的に取り組んでいる。他院再発例や初発進行例を多く引き受けた結果、昨年の外来化学療法施行件数は2,401件（前年比105%）と著増した。

『放射線療法』乳房温存症例や骨・脳・軟部組織（リンパ節・皮膚）転移症例に対して施行している。

[学術活動]

乳癌関連の諸学会での発表、論文発表を積極的に行っている。

[啓蒙活動]

医療者を対象とする講演会や一般市民のための公開講座などの企画・主催といった院外における啓蒙活動にも熱心に取り組んでいる。

*：小田高司、ほか ワイヤーマーカーを用いた三次元マルチスライスCT画像ガイド下乳腺部分切除術 手術61、2007

抱 負

今年10月をもって当科は開設4年を迎える。初期の3年間は水谷初代部長のもとでがんセンターとして乳癌診療体制の整備、乳腺医療チームの育成がなされ、外来受診数、手術件数および化学療法施行件数が増え三河地域における乳がん専門施設として当科が機能をはじめて現在に至っている。今後より高い信頼と実績ならびに研究成果を確立すべく、さらに研鑽を積む所存である。



